阿部幸夫著
幻の重慶二流堂
――日中戦争下の芸術家群像
〈東方書店、二〇一二年六月、二八八頁〉

「二流」と綴って「ぐうたら」と読むようだが、胸底に秘めた強靭な抵抗精神を多彩な遊び心で包み隠す文人・芸術家たちの日々の姿を、著者は彼らが活動の舞台とした重慶の街を歩き、検証しながら描き出す。

一九三七年、日本軍の猛攻の前に中華民国の首都である南京は陥落する。蔣介石に率いられた国民政府は長江中流域の要衝・漢口に首都を移すが、ここも長く持ちこたえることはできなかった。やがて長江上流に在って天然の要害の地として知られる重慶を臨時首都に定め、アメリカを軸とする欧米からの支援をテコに日本への抵抗を本格化させる。南京はもとより北京、上海など中国各地の政府中枢機関、大学を筆頭とする教育研究機関など、いわば中国の政治・経済・文化の中枢が重慶に移る。戦火を逃れた文化人の多くも、その中にいた。

中華民国の中枢が海岸線から遠く離れた重慶に身を潜めたのである。そこで地上部隊による攻撃を断念した日本軍は三八年末から四三年八月までの間、航空機による戦略爆撃によって重慶の抗戦意志を挫くことを狙った。日本軍航空機の猛爆は続く。にもかかわらず二流子たちの抵抗も続く。彼らは演劇を書き演じ続ける。

郭沫若が名づけた二流堂に集った唐瑜、金山、王瑩、潘漢年、馮亦代、戴浩、夏衍、陽翰笙、曹禺、老舎、陳白塵ら二流子の重慶における二流子ぶりが、著者の筆によって生き生きと描かれている。唐瑜を「『二流堂』の工程師」、潘漢年を「裏街道の仕事師」、戴浩を「『二流堂』の世話役」、曹禺を「全方位演劇人」、老舎を「生真面目な『どたばた喜劇』」、陳白塵を「中華劇芸社の書き手」と表現しているが、その〝キャッチコピー〟の見事さに感服するばかりだ。

より強い韜晦の意志を感じさせる二流子を名乗った彼らの魂胆に、ある種の清々しさと心栄えを感ずる。日中戦争下の臨時首都・重慶に集った二流子たちもまた、激動する政治に翻弄されながらも自らの意志を貫こうとする中国文人の伝統に生きたのであろう。であればこそ時移り、新たな政治的激変に見舞われれば、彼らはまた、新たな政治的激流に翻弄されることになる。それもまた二流子を名乗った彼らが背負わねばならない宿命だった。

だが重慶での二流子は、文化大革命では二流子として振る舞うことは許されなかった。それほどまでに文化大革命は強烈な政治の激流であり、それが中国の政治というものだろう。

巻末の「重慶『二流堂』関連人物ラフ・スケッチ（一九四二年）」「霧の重慶　演劇（話劇）公演一覧　皖南事変以降　一九四一―一九四六（～四月）」が嬉しい。

（樋泉克夫）